

---

# NYANKO番外編

姫百合

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

NYANKO番外編

### 【Zマーク】

Z1609F

### 【作者名】

姫百合

### 【あらすじ】

『NYANKO』の番外編で、リンクとミーのお話になります。

【完結しました】 サイト移転しました。しばらくしたら削除するのでご注意ください。

## 01 // 一歳（前書き）

読者様、ありがとうございます。  
作者・姫百合です。

NYANKO本編ではあまり書いてやれなかつたリンクと//一ナの  
お話になります。  
本編を知らない方は分かりづらこかもです、すみません・・・。

これは今からもう、8年前へと遡った話となる。

葉月島はもうすくで凍えるような冬が終わり、春がやつて来る。  
(はーるが來ーたー、はーるが來ーたー　　どーにーにー來たー  
やーまに來ーた　　さーとに來ーた　　おれにもー來たあああ  
あ )

昨日買いたてのふかふかの羽毛布団の中、目を覚ましたリンクの  
脳内に一足早く春の歌が流れていた。

その原因は……。

布団から覗く白猫の耳。  
さらさらとした毛質の、ライドブラウンのおかっぱ頭。  
ちょっと布団をめくれば、無防備な寝顔とピンク色の首輪がお皿  
見えする。

「朝やでー、ミーナ」

ホワイトキャットのミーナを買い始めたのは、つい昨日のこと。  
モンスター狩の人間たちに追われ、大暴れしていたミーナ。  
親友のリュウのところのブラックキャットのキラが何を言つたの  
か、ミーナはリンクのペットとなることになった。

理由あつてずぶ濡れになつた身体拭くために一皿マンショニに戻つたあと、ミーナにピンク色の首輪と好きな服を買ってやつて、高級レストランのフルコースを堪能して、たくさんのビールとふかふかの羽毛布団を買って帰宅。

せんせん飲んで酔つ払つて、リンクとミーナは一緒に羽毛布団に倒れて眠つた。

ミーナが手の甲で瞼を擦る。

「……みる……？」

ミーナの愛らしきグリーンの瞳が、リンクの顔を見上げた。

「おはよう、ミーナ

幼女の残るリンクの笑顔。

(悪くない)

わへ、ミーナは思ひ。

「……ガキっぽいな、わたしの飼い主は」

「あつ、『ハ』と、リンクが口を尖らせた。「朝起きたら、まやは『おはよう』って言ひやせやで？ ほひ、言つてみ」

ミーナが困惑したのか、リンクから皿を逸らして落とす。倒つた。

「……お……せ……よう……」

「……。まあ、ええか。よく出来ました」

リンクに頭を撫でられ、少しだけミーナの頬が染まる。

「あ、せや。風呂入りたいやろ？ ちょっと待つてや」

リンクがバスタブにお湯を出して戻つてみると、携帯電話が鳴つた。

「ふにゃつー？」

と、ミーナがその音に驚いて小さく飛び跳ねた。

「大丈夫大丈夫、怖いもんやないから」 そう言って笑つたあと、リンクは電話に出た。「はいはーい ただいま」 つづき「ゴキゲンなり クやけどー」

「キラだぞ」

「おひ、キラか！ 何、どうしたんー？」

「ミーナの様子せざうかと思つてな」

「どうして 」

「ミーナに代わってくれ」

と、キラが言つので、リンクはミーナの白猫の耳に携帯電話を当ててやつた。

「ミーナ？ 私だ、黒いのだ。キラだ」

「キ、キラフ?」

ミーナの声が裏返つた。

あたりをきょろきょろと見回す。

どこだつ？ 来てゐるのかつ？

「されば電話と書いて、離れていても話すことができるものなのだ」

ほんとうにそれなのかな?

「それで、三二十九、ペジエとな」てみて、どうだ？

「はなべく懇ぐわす」

「 そうか。ならば良かった。野生の頃とは違う生活だからな、困ったときは私にいつのぞ？」 助けられることならば、助けてやるわ」

「おおつ。頼りになるぞー、キラー。ですが先輩ペットだぞーつ」

と、目を輝かせてミーナ。

ミーナとキラがあれやこれやと話している間にバスタブに湯が溜まり、リンクは湯を止めに行つて戻ってきた。

「ミーナ、風呂溜まつたで。昨日場所教えたから分かるやろ? は脱衣所にある洗濯機の中に入れときや」

リンクがそう言つと、ミーナが携帯電話をリンクに渡してバスルームへと入つて行つた。

そのあと、リンクはまだ切つていなかつた携帯電話に耳をつけた。

「もしもし、キラ？」

「なあ、リンク」キラが詰へ。「昨日風呂に入るとさ、ミーナ大丈夫だったか?」

「いや、今初めて入るんやけど……？」

「たぶん大暴れするぞ。私がそうだつたし」

「へ？ 大暴れつて」

リンクの声を遮るまゝ、ミーナの呟き声が響いてきた。

ミーナがバスルームから素っ裸で飛び出してきて、リンクも驚倒して叫ぶ。

「きつ、貴様っ！」ミーナがリンクを指差して叫ぶ。「わっ、わ  
たしを煮て食う気だったのだな！？」

「はあ！？ なつ、何言つてんねんつーーー！」

「あああああ、た、助けてくれキラアアアアアアアーーー！」

と、リンクの手から携帯電話を引っつかんだミーナ。

慌てて耳に携帯電話を押し当てる。

「キラ！？ いるかキラーーー？」

「こるも、ミーナ。落ち着け」

「わ、わわわたし煮て食われるがつーーー 食われるのだつーーー！」

「落ち着け、ミーナ。それは風呂とこでな、慣られれば気持ちの良いものなのだぞ」

「そ、そそそ、そつかつ。そつなのだなつーーー？」

「うむ。私も最初は怖かったが、リュウに抱つこしてもらつて入つたから大丈夫だつたぞ」

「そ、そ、そつかつ……」と、ミーナがリンクの顔を見上げた。「主に抱つこして入つてもらえば良いのだなつ？ 初めての風呂とこつものまつ……」

え？

田をぱちぱちとしたリンク。  
みるみるうちに顔が赤くなつていぐ。

「ぱつ、ねまつ……なつ、何言つて……」

「よし、分かつたぞキラ。初めての風呂、がんばるぞ!」

そう言い、携帯電話をベッドの上にぽーんと投げたマーナ。必死な様子で、リンクの腕を引く。

「リンク、一緒に風呂入つてくれつ!」

「あつ、あかんつ、あかんあかんあかんあかんあかんあかん!?! そんな12にもなつて!…」

「うーわーいーの一だあああああつ!…」

「入つてみれば馴れるから!…すぐ馴れるから!…な!/?頼むからーぽーんで入つてやあああああ!…」

逃げ出すリンクの背に、ミーナがしがみ付く。

「いーやーだああああああ!…」

「かつ、勘弁してええええつ!…」

リンクはベッド上の携帯電話を再び手に取り、半ばパニックになりましたが、リコウに電話をかけた。

キラが出ると思ったのだが、聞こえてきたのはリコウの声だった。

「なんだよ、リンク」

「リュ、リュウ！ ちょ、た、助けてっ！ ふ、風呂つ、風呂一緒  
について……！」

「一緒に入つてやれよ」と、リコウはあつやつと囁いた。「ハナの主だら、おまえ」

「……………」おれ、おまえたちで一人、ひとりだけはねえんだよ。

「俺だって女のキラと一緒に風呂入ってるぜ」

「おまえらはすでに大人の付き合いしてるからえーねん！ おれは  
一緒に風呂入れつて…えええええー！？」

「なんだよ、リンク。おまえ、ガキ相手に興奮すんのかよ。変態め」

「…ひさしごちまつ」

「じゃあ一緒に入つてやれよ。んなに狼狽してつと、本当に変態なんじゃねーかつて逆に疑うつつーの。じゃーな」

「ちよつ、待つ

待つてくれ！

といつリンクの願いなんてお構いなしに、リュウは容赦なく電話

（逆に変態かと疑われる……！？ そ、 そいつがわざわざとそいつかわ……！？）

動揺するリンクの背で、ミーナが泣き出す。

「ふみやあああん…怖いのだつ…」  
「わーーのーだああああ  
あ…！」

「な…泣くなやつ…」  
「わ…わかつたから…」

バスルームへと向かうリンクの手足が同時に動く。

脱衣所に入つて、リンクが腹に回つてくるミーナの腕をはがす。

「ほ、ほひ。離してや。服脱げなこやひ…」

「う、うむ」

ミーナが泣き止み、リンクから手を離して涙を拭つた。

リンクは服を脱いで、背にいるミーナにさりに背を向かせさせてからキャラクター柄のトランクスを脱いだ。  
しつかりと腰にタオルを巻いてから言ひ。

「もうええで、じつち見て…」

ミーナは振り返ると、急いでリンクの前に回つた。  
必死な様子でリンクの首にしがみ付く。

「だつ…抱つこあるのだつ！ 抱つこー、お、落とすなよつー…？」

「わ、分かつとる…」

リンクは言いながら、小さなミーナの身体が落ちないように左腕で抱き締めてやつた。

まだ子供でも、やつぱり女の子の柔らかさをリンクの胸元に感じた。

リンクがバスタブに足を入れて、ミーナの足先が湯に触れる。

「みやつ」

と、ミーナがびくつとして足を折り曲げた。

「大丈夫やで、大丈夫」

リンクはそう言つて、ゆっくりと湯の中に入つていった。  
怯えたミーナの爪が肩や首に突き刺さる。

はつきつ言つてえらく痛いが、リンクは堪えて何ともないふりを  
し、ミーナを落ち着かせるように言つてやる。

「ほら、大丈夫や。怖くないやろ？」

リンクがミーナの小さな肩などに湯をかけてやると、やがてミー  
ナが落ち着いてきた。

リンクにしがみ付いている腕の力が抜けていく。

そのときになつて、ミーナはよつやく氣付いた。

自分の爪で、リンクの首や肩から血が出ているのを。

「あつ……」

ミーナの顔が狼狽し、リンクは笑いながら言つ。

「なーーー、これくらいに平氣やつて。おれやて一流ハンターやから、これくらいこの傷なんて」

えつ…？

リンクは言葉を切つた。  
首に、肩に、ミーナの舌を感じて。

「ちよ、ちよちよちよちよ……ー？」

リンクの顔が真つ赤に染まつていく。  
一方のミーナは、焦つた様子で血の出でこむリンクの首や肩を舐めている。

「「」、「」ぬんなせこつ…「」ぬんなせこなのつ…」

「い、いやにやにやにやにやにやー、い、いいいいいいからつー、  
いいからミーナつー！ 平氣やからつー、なつー？ もう舐めない  
でええからー、なつー？」

「…」

リンクは慌ててミーナを引き剥がした。  
心臓がばくばくとしている。

「ミー、ミーナーーー？ ふ、風呂、も、もつ慣れたかー？ 慣れたやう  
ー！」

「うむ、もう大丈夫だぞ。それより傷

「えーーからつーー！ もう舐めんでえーーからつーー！ ほ、ほな  
つ、おれ先に上がつてるなつーー！？」

そう声を裏返して言つて、立ち上がつたリンク。

ズルツ

腰からタオルが落ちた。

— ! ?

「？ リンク、何だソレ？」

「み、見ないでええええええええええええ！」

ありがたいことに、ミーナは無事、次から一匹で入浴してくれるようになった。

リンクがミーナを買い始めてから約2カ月半。ただいまリンクとミーナは、リュウ・キラと共に睦月島にいる。

葉月ギルド長の別荘で寝泊りしているのだが、リュウとキラは2階にあるベッドで、リンクとミーナは屋根裏部屋で眠っている。

現時点で21歳のリンクと12歳のミーナは『おやすみのチューリング』を頬にする程度。

リンクはそれ以上はする気ないし、考えていなかつたのだが。

「なあ、リュウ？」ミーナが布団の中で突然こんなことを訊いてきた。

「なあ、リンク？　あと数年したら、リュウとキラが特に夜にやつていることをわたしに教えてくれるのか？」

つまり、夜の営みである。

「な……」暗闇の中、リンクは赤面した。「なんやねんっ、いきなりつ……？」

「今日、リュウに言われたのだ。わたしもあと数年すれば教わるつて」

「なつ……なにこいつらんねんつ、リュウの奴っ……！」

「教えてくれないのか？」

「えつ！？」リンクの声が裏返る。「いや、その……。お、おまえが20歳になつたら考えるわつ……」

「まだまだではないかつ」ミーナの頬がむくれた。「リュウはそれが大人の愛情表現だと言つていた！　わ、わたしだつてあと数年すれば大人ではないかつ……！」

「お、おれからすれば子供なのっ！ そ、それは本当に大人の行為  
なんやからなつ……！？」やり方によつちや、お腹に赤ちゃんできん  
ねんからなつ……！？」

「赤ちゃん」ミーナが鶴返しに言つた。「大人の行為をすると、赤ちゃんができるのか？ 大人の行為ってどんなことをするのだ？」

「え…えと…、せやから…な?」

「うむ？」

「大人の行為とは……」「、」「ウノトリさんと一緒に呼ぶ」とや  
！」

「おお」ミーナが声を高くした。「そ、うか、コウノトリという鳥が、赤ちゃんを持つてくれるのか！ リュウとキラは、いつも一緒にコウノトリの名を叫んで呼んでいるのだな！ それが大人の行為なのだな！？」

と、ミーナの疑問が続く。

「ツクウとキラは毎晩「カホトコ」を呼んでこゐるが、「カホトコ」は  
来ないのか？」

「えつ？」

「なあ、どうしてだ？」

「あ、あ、あれやな、きっと。窓閉まって入ってこれなかつたん

やなつ 「

「何。残念な」とをするべー

「そ、それがコウノトリさんがないやなつ

「ほお。 そ、うか、コウノトリは色々な人に赤ちゃんを配つて回らな  
いといけないからなつ

「そ、そ、うう。 あは、あはは

ミーナがコウノトリを知ったのは、このときだつた。  
そしてこれを、ミーナは結婚するまで信じことになるのだつた。

## 01 // 一歳（後書き）

本編完結時にメッセージくださった読者様、ありがとうございます！  
とっても励みになります！

## 02 ミーナのファーストキス

睦月島から葉月島へと戻ってきて、リンクは師匠であるグレルと再会し、そのペシトのミックスキャットであるレオンと出合った。

リンクがレオンに殺されかけたとき、ミーナにとてもない恐怖が襲つた。

リンクのその明るい笑顔が、優しい手が、なくなってしまったらどうしようと。

その日の夜は、リンクが苦しむくらい胸に強くしがみついて眠つた。

それからキラがリュウに何かを買つてもうひとつ、とにかく同じものをほしがるミーナが故に、一般人からすればずっと裕福なリンクだが家計は火の車になることもしばしばで。

春にタコ焼き売りをしたときに続いて、大食い大会に参加したこともあった。

それで優勝した賞金で、ミーナは次の日キラと買い物にでかけた。何を買つてきたのかと思ひきや。

「見てくれ、リンク！」

「ぶつ」

そのときビールを飲んでいたリンクは、思わず吹き出した。

（やうが、そろそろ必要だつたの……）

なんて思う。

「キラとお揃いのブラショーセットとこいつやつだ！」

ブラショーセット＝ブラジャー＆ショーツセット。恥ずかしげもなく「ゴーゴー」と笑って、ミーナはそれらをリンクに見せている。

それにしても。

「それ、つける意味あんのかいな」

と思つぽど、まだペッタンコのブラジャーで。ミーナがムツとした顔で囁く。

「寄せれば谷間ができるかもとキラが言つていた！ 駄目だつたらパッド作戦があると言われた！ わたしだつて大人の女だぞっ！」

「いや、パッドでかくしたところで一セ乳やん…。大体、12のくせに大人の女も何もあるかいな……」

「ちなみにサイズはA65だと言われたぞ！」

「ペッタンコやん」

「キラはF65だそうだぞ！」

「でかつ」

「こいつかわたしも『カップ』になるかっ？」

「知らんわっ」

「せうなればリンクなんてイチロロだと言われたのだが、イチロロとはどうこいつ意味だ？」

「な…」

「でもじカップあれば良いのではないかと言われたのだが、そういうのリンク？」

「ま、まあおれはそれくらいで…」

「じカップあれば挟めるか？ どうもこコウは挟みたがる感じのだが、何を挟むのだ？」

「なつ、なんの話してんねん、おまえらは…………」

リンクは顔を真っ赤にして突っ込んだ。

「あ、それからリンク、キラから伝言だぞ」

「な、なんやねん」

「『『初めての二ヤン二ヤンまであと5年は我慢しin』』

「二ヤン二ヤンが二ヤン二ヤン言つなつ…」

「それから『ファーストキスは初潮を迎えてから希望だそつださ

初潮。

「 そうか、 そうだった。 」

「 女の子の場合、 そういうものがあるんだった。 」

（ って、 初潮迎えた場合、 おれが教えるんか！？ それがどういう意味かとか、 他いろいろ！？ いや、 待て ！ ）

一瞬焦ったリンクだが、 はっとしてミーナに訊いた。

「 お、 おい、 ミーナ？ 初潮の話したってことは、 キラから何か教わってきたんやろ？ 」

「 うむ。 初潮とは『 初めての股から流血 』 だと聞いたぞ 」

「 ちよ …… 」

「 もつと他に説明ないのか、 あのバカ黒猫は。 」

「 顔が引きつるリンク。 」

ミーナが続ける。

「 それから、 それが始まると大人になっていくのだと聞いた 」

「 おお、 それなりに説明してるやん、 キラの奴 」

「 わたしも早く股から流血したいぞーっ 」

「 その言い方やめろや …… 」

「それで大人になつたら」と、ミーナが少し頬を染めた。「唇にキスしてくれるかつ？ キラの言つた通り、してくれるかつ？」

「キ、キラの言つた通りつていつか、単なるキラの希望やんつ……」

「してくれるかつ？」

じめどもとした様子で、リンクを見つめてニルーナ。リンクまでじきじきとしてしまつ。

「ち……されたいんか、おまえ」

「キラとココウはいつもいつもしている。わたしだつて、主のおまえとしてみたいぞつ……」

そんなことを愛猫に言われて、嫌な気がするわけがない。だけど、リンクから見たリーナはまだまだ子供で。

「と……とらあえず、もう一歩リーナが大人になつてから考えるわ」

そう言つてこの場を逃れた。

もう一歩大人になつてから考える。

リンクがそんなことを言つてから、早8ヶ月。

その間にリンクとミーナの間に何があつたわけでもないので、いきなり飛んできます。

ただいま22歳のリンクと13歳のミーナは、リュウとキラの結婚式の帰り道を歩いていた。

ミーナはキラから投げ渡されたブーケの香りをくんくんと嗅ぎながら、リンクに抱っこされている。

「ものす」一く綺麗だつたな、キラ…」

「ああ、せやな。ほんまに綺麗やつた。キラがリュウを置いて逝かへんで、ほんまに良かつたわ。」じつは幸せそうやつたなあ、リュウ

そう言つて、親友の幸せに涙ぐんで微笑むリンク。  
ミーナがリンクの顔を覗き込んで訊く。

「リンクも、わたしと結婚したらリュウのように幸せになれるか?」

「え…」リンクは少し赤面してミーナの顔を見た。「け…結婚つ?」

「しない…のか?」ミーナの顔が沈む。「ブーケを受け取つた者が、次に結婚できるのだと聞いた。…それなのに、わたしリンクと結婚できないのか?」

「いや、その…」

「わたしは、一生リンクのペストで終わつてしまつのかつ?」

ミーナのグリーンの瞳に、涙が滲む。

リンクは慌てて言った。

「い、いやっ、そんなことないで、ミーナっ……せやなっ……うーん。おまえが今のキラと同じくら、うーん……、20歳になつたとき、結婚しよなつ？」

「ほ、本当かリンクっ……？」

「ああ」そう言つてリンクは笑つた。「おまえがそうしたいつていなうならな。おまえがそれで良いなら、おれはこつこつと幸せ者やで」

「そうだな、リンクもてないしな」

「おまえ……」

リンク、苦笑。

「それで」と、ミーナが続ける。「唇にキスはまだか？」

「……も、もう一歩大人になつてからつて言つたやろつ……？」

「もう。早く大人になりたいぞ」

そう言つてミーナは、リンクの頬にキスした。

それから5ヶ月。

リンクとミーナは、城と見間違つようひな屋敷の前に目を丸くして立つていた。

「でっか

リンクの顔が引きつる。

- 二二二 -

と、ミーナが瞳を輝かせ、玄関へと走つていった。  
大きな玄関のドアを押し開ける。

静かにせい、ミーカ。ショウが寝てたらどうす

ソの後、剛毅は一聲を落らじうは、

屋敷の奥から歩いて出迎えてくれたのは、リュウ・キラの息子である生後約1ヶ月のシウウで。

「うーん、リンク、そーそー、カーナー、うーん！」

「ちよ、ちよ、ちよ！ リュ、リュウ、シユ、シユウ、な、何で歩いて……ー？」

「俺も最初はびびったが……と、リュウ。『師匠に聞いたところ、人間とモンスターのハーフは生後1ヶ月もすりゃ、歩くらっせ』

「純粹な猫モンスターだったら、生まれて3日で歩くのがな」と、キラが続いた。『なかなか歩かないから心配したぞ』

「なんだ、まだ歩いていなかつたのか、シユウ『ミーナがそう言つて、やつてきたシユウを抱っこした。『わたしとリンクの子も、1ヶ月にならないと歩かないといつことか』

「え」

と、リュウがぱちぱちと瞬きをした。  
リンクを見る。

「何、リンク。おまえ、ミーナともう子作りしてんの？」

「してへんわつー」

「でもまだ出来ねーだろ？」

「しりへんわー」

「で、1日何回？」「

「しりへんわー」

リュウとリンクが騒がしくやり取りしている中。

キラがはつとして、ミーナの腕からシユウを下ろした。  
ミーナの手を引っ張つて、数え切れないほどある部屋の一室に入  
つていく。

それから少しして、ミーナが笑顔で走り戻ってきた。

「>?

リンクは眉を寄せた。

い一の間にかミリナのスカリトが変わっている

あとから歩いて戻ってきたキラに、リュウが訊く。

「今夜は赤飯か？」

「うむ」

と、笑顔のキラ。

..... ؟ )

リンクがミーナの顔を見ると、ミーナが嬉しそうに笑つて言った。

「わたし、股から流血したのだ！ 大人になつたのだ！」

「ああ、リンク」と、キラがリンクの肩を叩いた。「よく我慢した  
な。予定通りキスして良いだ」

「よ、予定通りって……」リンクは赤面した。「た、単なるおまえの  
希望やないか……」

「何つ」キラが皿を丸くした。「それではおまえつ、もつ!!」  
ファーストキス奪っていたのか……？」

「してへんわつー」

「ああ、良かつた。ああ、しゅ。ありがた〜〜〜く、しゅ」

「し、しゅつたつて、オイ……」

リンクは戸惑いながら再びミーナに顔を向けた。  
ミーナが瞳を輝かせている。

(す、するべきなんやうつが……?)は……? いや、しかし……)

リンクがいつまでも戸惑つていると、リュウが溜め息を吐いた。

「せつとつるよ、キスくひー

「せ、せやけぢつ……」

「キスなんて挨拶代わりにしてる體だつてあるんだからよ

「せ、せやけぢつ、うーん……」

「据え膳食わぬは男の恥。つーか、モテねークセに焦らしプレイすんなよ、おまえ」

「プレイ言つなつー！」リンクは突つ込んだあと、リュウとキラに向かって。 「わ、分かったから見るなつー。恥ずかしいつー！」

「はいはい」

と、リンクとミーナに背を向けたリュウとキラ。

それを数秒の間確認したあと、リンクはまちつ少しリュウとキラから離れた。

もう一度振り返つて見ていないことを確認し、首にぶら下がつているミーナに目を落とす。

（え、ええんかな…）リンクの胸が鼓動を上げる。（ええんかな…、おれなんかで…）

瞳を潤ませ、頬を紅潮させて、ぎゅっと瞼を閉じたミーナ。

リンクは小さく囁いてから、ミーナの唇にそっとキスした。

「あ…ありがと…」

キスしていたのは数秒間。

リンクが唇を放すと、ミーナが嬉しそうに笑つた。

「うわーいっ」ぎゅっとリンクの首にじがみ付いて、ミーナは

言つ。「見てたか、リュウ、キラ？」

「ぱつぱつ」

と、リュウとキラ。

「んなつ……？」リンクは顔を真つ赤にして振り返った。「みつ、見てたんかい!!!!」

リンクの首から降り、ぴょんぴょんと跳ねてキラに抱きついたミーナ。

「キラつ、キラつ、わたし少し大人になつた気分だぞつー。」

「ああ、そうだな。ファーストキスは甘かつたか？」

「カレー味！」（昼食に食べた）

「辛いな

「うむ！」

はしゃいでいるミーナの傍ら、リンクは口をぱくぱくとしてリュウを見ている。

「なつ、なつ、何見てつ……！？」

首まで赤く染まつたリンクを見て、リュウがにせりと笑つた。そして言つ。

「良かつたな、リンク。めでたいぜ」

「え？ あ、ああ。あ…ありが

「ローラー」

と、短く嘲笑したりユウ。

屋敷中に、リンクの声が響き渡つて言つた。

寝る前、ミーナは日記帳を開いた。

××年6月 日

今日は、新しくできたキラとコユウの家に遊びに行つた。  
おどろくほど大きかった。

初めてマタからりゅう血して、うれしかった。  
リンクと初めてキスした。  
カレー味だった。  
少し大人になった。

夜ごはんは、キラがせきはんを作ってくれた。  
うまかったぞー。

××年9月 日

わたしは14才になつた。  
また少し大人になつた。

さい近、わたしはかみの毛をのばしている。  
キラと同じくらまでのばすのだ！  
キラと同じように、女っぽくなるのだ！

××年11月　日

キラとリュウに、女が生まれた！  
ミラが生まれた！

シコウが生まれるときもそうだつたけれど、5ヶ月でハラからで  
てくるハーフの子どもに、リンクはまたおどろいていた。

わたしも早くコンクとの子どもがほしいぞ。  
ひとりでコウノトリをよんでもたけど、きてくれなかつた。

××年3月　日

今日は、キラと買い物に行つた。  
ブライジャーがきついと思ったたら、Bカップになつていた。  
こいつかキラみたにFカップになれるかなあ？

××年6月　日

リュウとキラに、また女が生まれた！  
名前はサラと名づけられた。  
やっぱり女はかわいいぞー。

ひとりでコウノトリをよんだせいか、やっぱコウノトリはこな

かつた。

リンクはまだ、一緒に「カウノトリをよんでもくれない。  
どうやらわたしは、まだまだ子供らしい。

××年9月 日

わたしは15才になつた。  
また少し大人になつた。

かみの毛の長さも、キラに近づいてきた。  
身長は、気付いたらキラと同じになつっていた。  
うれしかつた。

××年12月 日

今日はクリスマス・イブだつた。  
リンクとデートした。

キラがリンクに電話で「ニヤンニヤンはまだだぞ」と言つていた。  
ニヤンニヤンってニヤンだらう?

今日のキスは、いつもより少しだけ長かつた。  
なんだか、すごくドキドキとした。

××年2月 日

リュウとキラに、今度は双子の女が生まれた！

姉の方がリンクで、妹の方がランと名づけられた。

女ばかり生まれて、わたしはついやましい限りだぞ。

まだひとりで「ウノトリ」を呼んでいるわたしには、まだ子供がない。

早くほしにのに、リンクは一緒に「ウノトリ」を呼んでくれない。わたしはまだ、子供らしい。

××年8月　日

今日は、リンク25才の誕生日だった。

いつもやうだけれど、キラとリュウ、それからグレル師匠とレオンで祝つた。

それから、キラとリュウの子供たちも一緒に祝つてくれた。

グレル師匠がリンクにプレゼントした『いくむひぞ』って、何なのだろ？

リンクが「おれはふさふれやー」つぶえらへ怒つていた。

ようやくリンクが、20歳くらいの男に見えるようになつた。

わたしの主は、やつぱりガキっぽい。

でも、その笑顔は悪くない。

××年9月　日

わたしは16才になつた。

髪の毛が、腰まで伸びた。

やつとキラと同じ長さになつた。

キラに「女っぽくなつた」と言われて嬉しかつた。

キラにお化粧道具一式をプレゼントしてもらつて、キラにお化粧をしてもらつた。

舞踏会へ行くとき以外では初めてで、なんだかちょっと恥ずかしかつた。

でもそのあとリンクにも「女っぽくなつた」って言われて、とても嬉しかつた。

それから、キラがリンクに『ニヤンニヤン』まであと1年の辛抱だ!』と言つていた。

だから、ニヤンニヤンつて????

××年12月 田

今日は、キラとリュウの誕生日パーティーだつた。

キラ24才でリュウ25才。

モンスターのキラがそれ以上見た目が変わらないのは分かっているけど、どうして人間のリュウまで老けないのだろう?

その理由をリンクが、「もともと老け顔のせい」だと言つていた。

なるほど納得だ。

なんとか、見た田の年齢によらずやくコウの実際の年齢が近

づこてきたぞ。

でも物すゞへキャラとつっこむハコガウせ、やつぱつコンクムつずつ  
と良い男だぞ。

そう思つたのは秘密だぞ。

××年4月　日

すゞいぞ、わたし！  
じカツブだぞ！  
これでリンクなんぞイチコロだぞ！  
イチコロつて何ぞよ！

これでリンクの挟めるか！？  
挟めるのか！？  
というか挟むつて何をだ！？  
誰も教えてくれないぞ！

××年7月　日

リンクが超一流ハンターになつた。  
いつもリュウと並んでいるから弱く見えるけど、本当は強いのだ  
と知つた。  
ちょっととかつこいぞ、リンク。

リュウはもともとの超一流ハンターと、それから葉月島ギルドの

副ギルド長になつた。

仕事一つ一つの報酬額が、さらに上がつたらしい。

本当、金持ちだな。

あと、葉円島でペシトとなつてゐるモンスターがハンターの資格を取れるようになつた。

リンクとリコウのすすめで、18才のレオンがハンターになつた。ミックスキヤットのレオンは、やつぱり最初から超一流ハンターだつた。

それから背もぐんと伸びて、175センチらしにリンクよりも大きい。

最近のレオンはやたらとモテる。

××年9月　日

わたしは17歳になつた。

毎年のごとくリコウ一家のお屋敷でパーティーを開いてもらつた。パーティーのあと、キラがリンクに「よく我慢したな！　ニヤンニヤンして良いぞ！」と言つた。

そのあとリンクとわたしは、密間の中に放り投げられた。

ベッドの上で正座して向き合つて、わたしは顔を真つ赤にしているリンクに聞いた。

ニヤンニヤンって何なのかと。

リンクは少しの間、返答に困つたあと「つまりリコウとキラが毎晩やつている夜の行為・・・と答えた。

わたしは大喜びした。

わたし、やつと大人になつたのだ！

というわけで、わたしは窓を開けてリンクと一緒に叫んだ。

「コウノトリさあああああああんーーつて。

リンクはえらく恥ずかしそうだつたけど、わたしはとても嬉しかつた。

コウノトリは忙しいらしく来なかつたけど、それでも嬉しかつた。やつとリンクが、わたしと大人の行為をしてくれたから。わたし、リンクにとつてやつと大人になつたのだ！

そういうえばコウノトリを叫んだあと、リュウの大笑いが聞こえてきたのは何でだろ？

わたしがリュウの大笑いを聞くのはこれでやつと二度目のことだぞ。

そんなに面白いことがあつたのかなあ？

××年1月　　日

わたしは最近、悩みがある。

リンクが本当にたまにしか一緒に大人の行為をしてくれないのだ。一緒にコウノトリを呼んでくれないのだ。

おかげで、ほら。

まだわたしには子供がないぞ。

××年4月 日

ああ、ついやましい。

リコウとキラに、また女が産まれたぞ。  
しかも今度は三つ子だぞ。

名前は上から、コナ、マナ、レナ。

何だかもう、名前を覚えるのが大変になつてきました。

わたしも早く子供がほしこぞ。

××年9月 日

わたしは一八才になつた。

身長はもう伸びないらしく、キラと同じのまま変わらない。  
髪の毛はちやんとキラと同じ髪や。

まだ子供ができない。

リコウとキラは毎晩コウノトリを呼んで子作りしているのに、どうしてリンクはわたしとたまにしかしてくれないのだろう。  
キラにあつて、わたしにないものでもあるのだろうか。

キラにあつて、わたしにないもの?  
まさか。

乳か!?

そりやか、じカッピじゃダメなのだ!

××年1月　日

誰か助けてくれ。

（カップから成長しないぞ。）

キラが揉むとでかくなるらしくって言つてたから、××××ヶ月揉み続けているのに何故だ。

リュウがリンクに揉んでもらつと効果的だと言つていたからリンクに頼んだけど、リンクはダメだと言つて揉んでくれないぞ。

（のままでリンクが毎晩子作りに励んでくれないぞ。）

どうすれば良いのだ、わたし。

××年5月　日

最近になつて気付いた。

夜になつても、コウノトリを呼んでいる人を見たことがないぞ。どうしてだらう？

わたしはこんなにも、子供がほしいところに。まあ良いか、世間のことは。

××年9月　日

わたしは19才になつた。

そして今まで一番嬉しいプレゼントを、リンクからもらつた。

ちょっと叫いけどりで、リンクがわたしに渡したもののはエングージリングだった。

プロポーズは「来年おまえが20歳になつたら、約束の結婚しような」って、優しい声で言つてくれた。

嬉しくて泣いてしまつた。

わたしは来年、リンクのお嫁さんになれるのだ。

って、そうか！

「ウノトリはわたしとリンクが婚約してなかつたから来なかつたのだ！」

キラの腹にウノトリが赤ちゃんを持つてくれたのも、リュウと婚約してからだつたしな！

そうか！

そうなのだ！

そうだつたのだ！

××年××月　　日

呼べばせつかくウノトリが来るといつに。

リンクは相変わらず、たまにしか一緒に呼んでくれない。

何でだろ？  
やっぱ乳かな。

巨むぐ。

××年1月　日

とても遠い島にいるリンクの親戚が、リンクから婚約したと聞いて訪ねて来た。

リンクはしばらく会つていなかつたらしいが、わたしは初めて会つた。

はつきり言つてすゞかつたぞ。

みーんなリンク口調で、あそこまで一杯いると何を喋つてこらのか分からなかつたぞ。

リンクいわく、えらく氣に入られたわたしは親戚一同に揉みくちゃにされたぞ。

3日間葉丹島にいると思つて、ちよつと疲れるのは秘密だぞ。

××年5月　日

「ウノトリ来ないぞ。

たまにしかリンクと一緒に呼んでいなくとも、全部合わせれば結構な回数で呼んでいるはずなのに、

何故だらう。

「ウノトリ、わたしには子供をくれないのかな。  
悲しくなつてきたぞ。

××年8月 日

リンクが29才になった。  
相変わらず童顔だ。

そしてわたしは来月で20才になる。  
リンクと結婚する。  
それなのに、まだ「ウノトロ」は来てくれない。

悲しくなつて泣き出したわたしに、リンクは「結婚式の夜に、全てを教えるから」と言った。  
とりあえず泣き止んだわたしだつたけど、それはどうこういとなのだらう?

全てつて?  
どうこういとなのだ?

××年9月 日

わたしは、明日で20才になる。

7年前に、キラとリュウが結婚式を挙げた教会。  
そこでわたしは、7年前にキラが着たウェディングドレスと同じデザインのドレスを着て、リンクと結婚する。  
わたしは、リンクのお嫁さんになるのだ。

じきじきして、今夜は10秒もの間眠れなさそうだ。

ミーナは手に持っていたペンを置き、田畠を閉じた。

振り返ると、もうベッドに入っているリンクが訊いた。

「今日の田畠、書き終わったん?」

「む」

「まな、おこでや」

そう言って、リンクが薄い布団をめくってミーナを腕に誘つ。ミーナは部屋の電気を消すと、リンクの腕の中に寝転がつた。抱き合つて、どちらともなくオヤスクのキスをする。

顔を離して、リンクはミーナの長い髪に指を通して囁く。

「髪、伸びたな。ほんま、すっかり女っぽくなつたな。最近、化粧も少しあるしな」

「ううだらう、ううだらう」

田畠にっこりミーナ。

リンクが笑つた。

「まあ、中身は子供のまんまやけどな

「ひめ田 まひ田 」

「明日」リンクがミーナの言葉を遮った。「明日の結婚式のあと、ほんまに大丈夫か?」

「? 何がだ。結婚式の夜に、全てを教えるって言ったことか?」

「ああ。それがどんなことでも、大丈夫か?」

ミーナは眉を寄せた。

暗闇の中、リンクが真剣な顔で訊く。

「ミーナ、ほんまにおれとの子供がほしいんやな?」

「…あひ、当たり前ではないか?…」

「……分かった。ほな、どんなことされてもええ覚悟でいてや」

と、リンクがぎゅっとミーナを抱き締めた。

成長したとはいって、キラと変わらない背丈のミーナはやつぱり小さい。

「ど、どんな」と…?」

「精一杯、優しくする…から」

「??.??.?」ミーナは混乱して眉を寄せた。「う…うむ? 精一杯優しく?ウノトコを呼ぼうな?…??.??.?」

「……」

リンクは苦笑したあと、もう一度ミーナの唇にキスして目を開いた。

「おやすみ、ミーナ」

「おやすみ、リンク」そう言つたあと、ミーナはまた口を開いた。  
「……なあ、リンク？」

「ん？」

「リンクは、わたしに言わないのか？」

「何を？」

「ヒュウがたまーーーにキラキラして、あの台詞だ」

と言しながら、ミーナが欠伸をする。

「う……」リンクの顔が熱くなる。「……言つた方がええかっ……？」

「好き、とは言われているけど、ソレは聞いたことがないからな」

「……わ、分かった」

リンクは咳払いした。

言つ覚悟をするまで数秒かかり、そのあと耳まで真っ赤にして言った。

「あ……愛してるで、ミーナ」

よし、言えた！  
言えたで、おれー

心の中でガツツポーズをしながら、ミーナの反応を待ったリンク。

「……」

「……ミーナー？」

「……」

「……おこへ？」

「……」

「……え？」

眉を寄せ、リンクはミーナの顔を覗き込んだ。  
暗闇になれて、ミーナの顔が見える。

そう、寝顔が。

「ねつ、寝たんかいっ！――」

「……みこ……」

すっかり瞼を閉じているミーナが、リンクの胸にしがみ付く。

「ま、まつたく、もひり……」一度と言ひてやらいへんからなつ……

「…

呆れながら、再び瞼を閉じたリンク。  
寝言のような口調で、ミーナが言つ。

「…わたしも愛してるのう、リンク…。愛してるのう…」

「……お、おう」

と、少し頬を染めながら返事をしたリンク。  
そのあと夢に入つていつたミーナの白猫の耳にキスして、ビキビ  
きとしながら微笑んだ。

(ミーナの白猫は、明日、ミーナの世で一番かわええおれのお嫁さんになる)

そして、

(つこにハカノトリがいなこと)を知る……)

明日の夜が楽しみのよつた、怖こよつた…。

リンクは苦笑したあと、ミーナを追つて夢の中に入つていつた。

## 03 // メモの日記（後書き）

次回ラストです。

## 04 ミーナの結婚とその後（前書き）

最終話ですー。

## 04 ミーナの結婚とその後

7年前、キラが立っていた場所。

キラが着ていたウェディングドレスと同じデザインのものを身にまとい、ミーナはブーケを持って頬を紅潮させて微笑んでいる。

ミーナ20歳の誕生日である本日、ミーナはリンクのお嫁さんとなつた。

主役は変わつたものの、7年前と同じメンバーが顔をそろえている。

主役のリンクとミーナに、リュウとキラ、グレルとレオン、葉月ギルド長と王子。

加えて、リュウとキラの子供たち一男七女。

「ああ……」リンクの瞳が恍惚とする。「かわええで、ミーナ。この世一かわええ……」

「ああ……」王子の瞳が恍惚とする。「何と愛らしい花嫁だ。私のものにしてしまいたい……。リンクには勿体ないな」

「ほ、放つておいてください。だ、大体つ、今日お妃様がいないからつて、そういうこと言つてると怒られますよー。」

「言つたら無人島へ流罪にするからな、リンク

「んな殺生なつ……」

リンクとミー子の傍ら、レオンが叫ぶ。

「本当、とっても綺麗だよミー子。あのときのキラみたいだ」

「うんうん」と、グレルが続く。「すっかり大人になつてなあ、おじちゃんは嬉しいぜ……！」

「ああ……、たしかにあのときのキラを思い出すぜ」と、リュウ。「あのときのキラは、本当まじ超半端ねー綺麗ただつたぜ……！」

そう言つてリュウが瞳を輝かせて見るのは、本田の主役ミー子ではなく、脇役のキラである。

そのキラが、涙ぐみながら微笑んで言ひ。

「大人になつたな、ミー子。とっても綺麗だぞ」

「ほ、本当かつ？」ミー子が声を高くした。「本当につ、本当に綺麗かつ？ わたし、綺麗かつ？ キラつ？」

「ああ。本当に、とっても綺麗だぞ」

ミー子の顔に満面の笑みがこぼれる。

リンクに褒められるのはもちろん嬉しい。

でも、本当の姉のように慕つているキラに褒められるのも、とてもなく嬉しい。

「ミー子姉、きれいー」

リュウとキラの子供たちに囲まれるミー子。

「ココウと並び、キラが並ぶ。

「なあ、ココウ？ ミーナ、本当に綺麗になつたな」

「ああ、綺麗だな（あのときのねまえが）」

相変わらずリコウの視線はキラから離れない。

（あ…、なんかあのときのキラを思って出したら魯山…）

キラのときに続き、今回も牧師役の葉月ギルド長が祭壇にあがる。

「セレ、やうそろ挙式しようつか

皆が指定位置に着いた。  
子供たちを前の方に並ばせたりコウ。  
キラと共に、その後ろに並ぶ。

葉月ギルド長が挙式を始める。

「汝リンクは…（中略）…誓こますか？」

「誓つひでー。」

「汝ルーナは…（中略）…誓こますか？」

「誓つひだー。」

葉月ギルド長が咳払いをして、

「では、誓このキスを」

リンクがミーナのベールをめくり、瞳を閉じて待つミーナにそつと口付けた。

微笑ましく拍手が漏れる。

「見てたかっ、キラつ?」と、ぐるりとキラの立っていた位置に顔を向けたミーナ。「って、あれ?」

ぱりぱりと瞬きをする。

「い、いないぞ! リュウもいないぞ!」

「あ、あれえ!?」リンクは教会の中をきょと見渡した。「挙式の途中にどこに行つたんや、あいつらつ……!?」

「探そつべ、リンク!」

急遽、やつこつとこなつた。

王子とつコウ・キラの子供たちを残し、リンクとミーナ、グレル、レオン、葉月、ギルド長は手分けしてリュウとキラを探し回る。

ドレスの裾を持ち上げ、教会の裏へと回つて行つたミーナ。

キラの声が聞こえてきた。

「ちよ、ちよっと、リュウ……こんなところで何を考えているのだつ……!」

続いて、リュウの声が聞こえてくる。

「ミーナ見てたり／年前のおおいた出しひ、つこ興奮しあがつた  
俺がいる」

「だ、だからってこんな神聖な場所でつ……！」

「神聖な場所で神聖に子作りしようぜ（謎）」

そんなリハビリの会話を聞いて、ミーカの白猫の耳がひくん

卷之三

それからひとと時計を立てないで、壁際を歩いていく。

（もしかしたら、呼び方の手本になるかもしけぬ……！）

と、角までやつてきて顔を半分出して覗いたミーナ。

？」

首を傾げた。

なんだ?

## 何をして いる？

コウノトリを呼ぶのではないのかつ?  
リュウは何故キラの服を剥ぎ取つて……?

おおーっ、やつぱりキラは乳でかいぞー。  
羨ましいぞー。

つていうか、何?

なんだ？

ロウソウノリハナ

なほりゆう

み、見ていて何だか物すごく恥ずかしいぞ！？

... 亂 = 16

何アレ！？

卷之三

ソレを  
一体どうす

え！？

ପ୍ରକାଶକ ପରିକାଳିକା

ええええええ――――――！？

パニク寸前のミーナ。

そこへリンクがやってきて、首をかしげた。

「どうしたん、ミーナ？　ソラ君とキラは

まで言つて、リンクは教会の裏にいるリュウとキラに気付いた。瞬時にミーナの田を塞ぎ、顔を真つ赤にして声をあげる。

! ?

驚倒して振り返ったキラ。

ミーナの姿を見て  
見る見る、手には顔が赤くなっていく

「……、ミーナ!? ちょ、ちょ、待つ……！ み、見てたのか

恥ずかしさと動搖でキリの声が裏返る。

リンクに田を塞がれているミーナが、困惑したように口を開いた。

「キ、キラッ…？ さあきのほー体なんだつ…！？」

「何つて、子作りだよ」

ミーナ、ガラリ困憊して歯をあがむ。

「二、子作り？ さ、さつきのがかつ？  
コウノトリを呼ぶのではないのかつ！？」

「まだ教えてなかつたのかよ、リンク……」やう言つて溜め息を吐いたあと、リュウは続けた。「あんな、ミーナ。コウノトリなんてのは存在しねーの。これが正しい子作りなの」

「えつ……？」

「分かつたらあつひ行つてくれんねえ？　途中なんだけビ」

「ミー、ミーナ来いつ……」

リンクはミーナを抱きかかえ、慌ててその場を後にした。まさかこんな形でミーナが現実を知るつとせ……。

教会の出入り口のところへ、ミーナが口を開く。

「リ、リンク。降りしてくれつ……」

「……お、おつ」

リンクの腕から降ろされると、ミーナはリンクの顔を見上げた。相変わらず困惑した様子で、ミーナが訊く。

「ど、どうこいつじなのだ？　「」、コウノトリはいなーのかつ？」

「……あ……あ。おひん……」

「……わ、わたしを騙していたのかつ？」

「ちや、ちやうでー。それはちやうー。騙すつもつで言つたんやないつ……」

必死に否定するリンクの顔を見て、ミーナは安堵した。

「そ、そつか。リンクがそりこりのなれば、そりなのだな。だ……だけど」ビーニーの顔が赤く染まつてこぐ。「子作りって、ほ、本当に子作つて、あ、あんな……ああああんなことをするのかつ！？ リュ、リュウとキラは、も、毎晩、あ、あんなことをしているのかつ……ー？」

「そ、そ、うか。で、ででも、あれなのだなつ？ あ、あああれが大人の行為なのだなつ……？ こ、今夜リンクはつ、あ、あれをわたしに教えるつもりだつたのだなつ……！？」

「好、我們走吧！」

「……」

ミーナが首まで赤く染め、リンクに背を向けた。

リンクは狼狽する。

（ああもうつー…どうしてくれんねんつ、リュウの奴ー…おれが優しく教える前に、伝えてしまつたやないかー…！…）

大変だ。

ミーナを宥めなければ。

コンクがミーナの肩に触ると、ミーナが小さく飛び跳ねた。

「みやびー」

「う、めんつ……」リンクは慌ててミーナから手を離す。「その……ミーナ？ そんなに怯えなこでやつ……」

「……」

「お、おれ……おまえが嫌やつひやーない、まだ何もせえへんからつ……」

「えつ……？」

ミーナが慌てたよつて振り返つた。

ミーナのグリーンの瞳が、じつとリンクの顔を見つめて潤む。

ミーナの反応。

リンクの胸が動悸をあげる。

「ミー、ミーナつ……」

「……こ、コンクつ……わ、わたし……」

「い、うそ……？」

「……！」……子供がほしーのだつ……リンクとの子供がつ……。それこそ驚いたけど……でもつ……ひかで……れつあは驚いたけど……でもつ……ひかで……

「… //、 //ーナ……？」

「お願いリンクつ、今夜は男らしくわたしを抱いてつ（ハート）」

と言つたのは、戻ってきたグレルである。

「氣色悪いわつ……」

その晩。  
結婚初夜。

リンク・ミーナ夫妻は、リュウ一家の屋敷にいた。  
新婚旅行に行かず何故ここなのかといふと、ミーナの希望だつた。

今日の晩に知つた本当の子作り。

リュウとキラのを見たとき、面食らつてしまつた。  
まさかああいうことをするのが、子作りだつたとは知らなくて。

あれが自分とリンクだつたらつて考えると恥ずかしかつた。  
でも、嫌ではなかつた。  
これで待ち望んだ子供がやつと出来るのだし、むしろとても嬉しい。

だけど、やつぱり少し怖い。

よつて、深く信頼する姉のよつなキラがいるここへとやつてきた。キラが傍にいるだけで、ミーナは安心できるから。

電気を消した客間の中、シャワーを浴び終わつて緊張した様子のミーナがベッドに腰掛けている。リンクが交代してシャワーに向かうと、キラがミーナのところへとやつてきた。

「キラ…

「大丈夫か、ミーナ」

ミーナはキラにしがみ付き、狼狽した様子で訊く。

「…、子作りつて、ど、どんな感じがするのだつ？　い、痛くないのかつ？　怖くないかつ？」

「大丈夫だ、ミーナ。きつとリンクはとても優しくしてくれるぞ。たしかに初めてのとき、女の方は苦痛を伴うが……。そりやもう、私がリュウに初めて抱かれたときは痛くて痛くて、いつついつつたくて」

「そ、そんなに痛いのか…？」

「いや、でも、私の場合はリュウが相手だからであつてな。ミーナは私のときほど痛みを伴わないと思つぞ」

「そ、そなかつ…」

「それに、愛する男が相手なら、痛みなど堪えられるところなのだ。ミーナよ、愛するものと結ばれたとき、とても嬉しいものだぞ？」

「結ばれ……る……？」

「ああ。今夜ミーナは、リンクと結ばれるのだ。そしてきっと、近いうちに可愛い子供を授かるだ。……なあに、大丈夫だ」そう言って、キラがミーナを抱き締める。「大丈夫だ、ミーナ。私はすぐ近くにいる。こわとなつたら私を呼べ」

ミーナがキラの腕の中で頷くと、キラがミーナの額にキスして客間から出て行った。

それから少しして、客間に備え付けのバスルームからリンクが出てきた。

(つこわつあまで、キラの声が聞こえたような……。)

と、リンクは客間のドアを開け、顔を出して廊下をあわあわと見渡す。

(よし、覗いてないな)

リンクはドアを閉め、念のために鍵もかけた。  
ベッドに腰掛けて、俯いているミーナのところへと歩いていく。

「ミーナ……？」ミーナの前、リンクは膝を付いてミーナの顔を覗き込んだ。「どうした……？ 怖いか？」

ミーナが首を横に振り、リンクの首にじがみ付いた。リンクが訊く。

「……ええんやな？」

少し間を置いたあと、ミーナが頷いた。

「あ……ありがと……」

そう言つたリンク。

ミーナがリンクの顔を見ると、リンクの唇が重なってきた。抱き締められてベッドの上に倒されて、恥じらいと動搖でグリーンの瞳が揺れ動く。

ミーナの身体に巻かれていたタオルを取つたリンク。

「う……」

鼻血吹きそうなる。

一方のミーナは戸惑つた。

「えつ？ な、なんだリンク？ ……？ ジカッピじゃダメか？ ……？」

「ち、ちが……。い、いつの間にかずいぶんと成長してたもんやから

……」

「そ、そつか？ ……。乳はこれくらいでも良いのか？ ……」

「お、おひ。じゅ、充分ですか？……！」ほな、え、えと……」

「う、うむ？」

「い、い、い、子作り開始してもええですか？……？」

「び、ビビ、ビビだぞ？……！」

「い、い、い、いたきまや……！」

「た、たたた、たーんとお食べ……！？」

10分後。

「えつ……あつ……！」

ミーナが苦痛に顔を歪めた。

溜まらすといつたよつて声を上げる。

「いたつ……痛いっ！ 痛い痛い痛い

「えー？ わ、わかった！ ほな」

「ふみやあああああん！痛いのだあああああーー！」

リンクの声を遮つて泣き出したミーナ。

呼んじやいまへす

次の瞬間。

ガシャ————ン！！

窓ガラス突き破つてキラ登場。

仰天して飛ひ上かり、ベッドに尻を付いたリンケ

キテかミーナに駆け寄る

大丈夫かミリナ！？

「いつ、痛いのだあああつ

「きつ、貴様！ リンク！」 キラがリンクの顔を見て牙を向いた。

「リーナが泣くほど痛がらせるとはどういう …… ん？」

と、キラが目を落としたのはリンクの股間。

ぱちぱちと瞬きをしたあと、笑つて言つ。

「なんだ、ミーナ。それくらい我慢してやらなければダメだぞ」

「グハアッ！！！」

リンク、キラの言葉に大衝撃。ベッドの上にうずくまる。

キラが笑いながらドアへと向かっていく。

「それじゃ、がんばるのだぞ、ミーナ リンクもな

と、密間から出て行つたキラ。

ミーナが声を高くして言つ。

「あー、かんせんか、わたくしー。」

— 7 —

「さあ、リンク、続けて良いぞ！」

- 1 -

「ん?  
どうしたリンク?  
ピクピクしてないで、早く続けてくれ」

「なあ、リンク？　わたし女の子供がほしいのだが？」

111

「……」

「おー、リンク？ 聞いているのか？」

「……」

「なあなあ、リンクつてばあ。ニービーべーつーはーー？？？」

リンクが待ちに待つ結婚初夜。

「そう、一体何年待つたか。  
この日をどれだけ待つたか。」

黒猫<sup>キラ</sup>のさしげない一撃により、大ダメージを食らって重傷を負った  
リンク。

ミーナと初めてのドキドキ作成は、中途半端なところでも虚しく  
終了した。

ミーナは田記帳を開いた。

××年1月 日

結婚してから約半年。

初夜はどうなるかと思った子作りだったけど、あれから一週間してようやく復活したリンクがしてくれた。

感想としては、やつぱり痛かった。

でもリンクと結ばれたと思うと、とてもなく嬉しかった。

そしてわたしは無事に子供を授かり、そして今日その子を産んだ。わたしにそっくりな、白猫の耳が生えた女の子だ。

リンクが、リーナと名づけた。

コウノトリはいないうて言われたけど、リンクとコウノトリがわたしにやって来てくれた。

わたしは今、とっても幸せだ。

リンクのペシトになれた。  
お嫁さんになれた。

リンクに出会えて良かった。

わたしは「のせーの、幸せな白猫だ。



## 04 ハーナの結婚とその後（後書き）

読者様、ありがとうございます！  
番外編も無事完結となりました。

次からは、本文の中に少し登場したリュウとキラの長男・シユウを主人公とした作品の予定です。

彼は人間とモンスターのハーフということで、『HALF NYA NKO』（はーふ・にゃんこ）・・・。  
すみません、そのまんまです・・・（笑）

次回作もお読みいただけると嬉しいです

読者様様へ、作者・姫百合でした！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1609f/>

---

NYANKO番外編

2011年5月5日00時29分発行